

異物

藤田 愛子

阻止闘争と言ってしまうと、最初から負けたも同然なのだ。阻止された試しはないのである。闘争とは負けるのを知りながらやるものなのだ。ホステスにしてみれば、花街遊びの戯れの色と袂に涙道。摘んでみしゃんせ一夜の憂さに、洩らしてみしゃんせ女郎花という心境なのだ。それでもわたしは、びっしり酒場の名前を書いた看板の並んでいる銀座の裏道にはいりこむ。色の道知らない堅気の女が色で金を巻きあげるホステスに逢いに行く。小さな酒場だが大きな女はそのママである。いかした若い男がケーキの箱を持ってやってくる。ママの方は銀座の口座番号を教えて振込みを待ち受けているが、プレゼントも歓迎する。若い会社員を長椅子に座らせママもその横に座る。ミニスカートから肉のついた脚がのぞいてる。男の煙草に手早くライターで火をつけ、自分も煙草を一本ぬきとって吹かしはじめ。

わたしはカウンターに座って青いカクテルを注文し、客の帰るのをじっと待っている。映画の荒野の七人なら分か

るが、墜ちぞこないの荒野の一人では話にならない。女がとつぜんカウンターの前にくる。先刻の客が帰ったからである。「今日はお一人でいらしたんですか」とわかりきったことを聴く。まるで貴女の主人ならどんなに嬉しいのに、と言っているように聴こえる。

「一度会社の社長を交えて、主人と貴方と私で話し合いを持ちませんか」単刀直入に話し合いを条件にもちだした。わたしは女に圧力をかけたつもりでいる。「何のことかわかりませんが……。私の方は仕事なので」女は微笑し、たばこをふかしとほけて見せる。「もちろんそれは解っています。しかし私立探偵に頼んで調べさせた貴女と主人のライターは揃っていますので……」

すると女は呆気なく社長同席で話し合いを持っていいと折れてきた。十回も寝てそれでいいのですかと、わたしの方が訊ねたくなる。

ホステスの突出した胸がぶるぶると震えている。女はうんざりした表情で話し合いに応じると言った。客がやってくる時刻なのでわざとなのだろうか。しかしそれが女の本音なら洋介の情事はいったい何だったのか。

夢中になっているのは夫だけなのか。ところが洋介はさすがにしたたかである。辛うじて踏みとどまる。話し合いとなると取締役としての社会的面子もたたないし、金をとられたうえ若い銀座のママから逃げられては夢のように輝

きだした毎日が消失する。もはや弾みのついた肉体に接するの不可能だ。なんといつても浮気というのは別問題なのだ。明るみにだされたときぐらいバツの悪いものはない。秘密が保たれていてこそ浮気なのだ。社長を交えて話し合いをすれば、女との逢う瀬をすべて認めたらうえ、女房にも誓わなければならない。そして女はいくばくかの金を貰って去っていくだろう。水商売なのだ。素人の女とは違う。企業の客は他にも幾人かいる。だから洋介は考えた。

有耶無耶にしてほとぼりの醒めるのを待つより他はない。なるほど洋介はわたしに誓わない筈だ。お許しください。以後あの女がいる酒場には行きませんとは決して言わなかった。表向き帰宅時間は早くなった。それも当てにはならない。丸の内界隈にいれば逢う時間はいつでもつくれるものだ。女房に恥じない人間はともかく最低の男だ。会いたけりや会うがいい。そのかわりわたしはあの手この手で夫の軀を手に入れた。愛がなくてもわたしの軀は鬨いで燃えてくる。ドッキングは快樂のためかも知れないが、わたしの場合は相手を絶望させるための行為にすぎない。

「お前疲れないのか……」洋介はしばしば音をあげる。おかしいのは果たしてどちらなのか。そんなことを続けているうちに洋介が獲物に見えてきた。金髪の酒場のママはまさに牝ライオンである。わたしもいつしか、女に負けない牝ライオンに変身していた。

それでも洋介は「失せろ、そばに寄るな」とは言わない。忍耐がよく賢い男なのだ。今は性の強制収容所に入られている。時期を持つのだ。ほとぼりが醒めれば再びあの女と逢う瀬を重ねてみせる。邪魔しようたつてそうはいかないぜ。牝ライオンのわたしは考える。

洋介が反抗をやめる気がないのも当然わかっている。だが獲物にいとむ蜜の味は忘れられない。サデイスティックな快感を得ようと法的に守られている。わたしがずっと眠らせていたもの、男としての洋介への無関心をあの銀座の若い女が、覚醒へと導いてくれたのかも知れないではないか。

*

出勤前の洋介がコーヒー豆を挽いている時床にぶつ倒れた。六十歳の冬である。脳梗塞だった。洋介の脳は油が切れて船舶会社の役員を引退した。わたしといえば闘争宣言を浮気阻止から介護に切り替えた。〈江戸は栄える大車輪、都大路は火の車、河原落ちるにゃ手形はいらぬ、引導渡され渡しくらかなか落ちねえ新左衛門〉と自分に宣言した以上、病人の洋介をしたがえて前に進まねばならない。